

## 第2部 小括

第3章、国民科国語の教材本文の表記面では次の特徴が見られた。

1. 分かち書きを文節単位にした
2. 拗音、促音を小文字に書き換えた
3. 繰り返し記号を文字に直した
4. 読点を加えた
5. 副詞・連体詞・接続詞などをひらがなにした
6. 漢字の混ぜ書きを解消した
7. 新出漢字の配当を変えた
8. 欄外漢字の廃止

これらは児童の発達段階を考慮し、音読のしやすさ、理解のしやすさなどに配慮して書き換えられた。また、これらの書き換えには教師の指導法を知識授与の教育から、読み、書き、話し、聞くという言語活動を重視した指導法に改めさせる意図があった。それは、児童は知識を教えるべき対象から、自ら学ぶ活動をさせる対象に、転換させ、教師の意識改革を求めている。児童を主体とするからこそ、「日常生活における話し聞く生活の指導」が成り立つ。国民科国語の教科書編纂者が求めたのは、児童の主體的な言語活動を重視した国語教育観であり、戦後につながる新しい教育であった。

第4章の教材本文の内容面では次の特徴が見られた。

1. 生活を題材にした教材の増加
2. 教材に親近感を持たせる語り手の設定
3. 国語の醇化のための口語敬体文の増加
4. 話し言葉を重視した教材の修正
5. 文語文教材の内容の修正

これらは児童が主体的に学習できるように配慮されていた。生活の題材を多くすることで、生活と教育をシームレスに展開し、自発的な学習ができるように配慮していた。また、語り手を児童と同年齢にすることで、教材に登場する児童に共感し、教材内容に深く感情移入できるように意図していた。共感のみならず、登場人物が話す標準語を朗読や対話、音読させることで、国語を醇化させようとしていた。文語文も児童が学習しやすいように修正が加えられ、内容を実感できるように配慮していた。児童の主體的な学習から、教材内容に感化させるようし、標準語学習ができるような学習者の配慮が見られた。その一方で、軍国主義の教材の場合は、登場人物である兵士に共感し、生活とシームレスに兵士や軍隊との関係を結びつけることになる。自発的な学習とは、自発的な内面の軍国主義化を達成する学習であった。言語活動を重視することは、このように内容に入り込むように仕組みられた方法であった。

第5章、軍国主義教材では、次の特徴が見られた。

1. 戦闘行為の生々しい場面は少なく、生活に結びついた教材から兵士の気持ちを理解することで児童の自由な読みを、朗読などから軍国主義の精神を、自発的に内面から深化させていくように仕組みられて

いた。

2 本文修正は、本文の主人公を学習者と同年齢にし、児童の目を通して兵士や軍備について感動するように書かれている教材が作られ、それを学ぶ児童は主体的に自発的に主人公が感じた気持ちを理解することで、児童自ら内発的に軍国主義の精神を起こさせ、国のために戦争に参加し、犠牲になってでも功績を挙げようとする意欲を「涵養する」ためであった。

3 「読むこと」「話すこと」「書くこと」の言語活動は、内容を深く理解するための活動であり、自ら軍国主義教材を肯定的に受け入れるための活動になっていた。

4 教科書本文の軍国主義の語彙は「天皇」などの皇族よりも「兵士」や「軍」などの戦争に関わる語彙が増加しているため、国民科国語の教科書は「ミリタリズム」の教科書であり、それを支えているのが「ナショナリズム」であった。

第6章、メディア素材の取り扱い方では、メディアの特性を説明する教材は少なく、日常生活にメディアが小道具のように登場している教材が多かった。その一方で、ラジオや映画では、児童に兵士として国のために犠牲になる精神を鼓舞するような内容がメディアを通して児童に伝えられている様子を教材にしていた。

特にラジオは戦意高揚のためのメディアになっていた。本や雑誌などの活字媒体に比べて、音声媒体のラジオは一斉放送が可能であり、速報性と同時に音声により聴衆を引き込む機能があった。また、一般にラジオ受信機が普及し始めた頃であり、教育的利用だけではなく、国策的にもラジオを唯一の情報収集のメディアとして国民に認知させる必要があった。教室で学校放送を一斉に聴くことで、日常生活でもラジオを聴く態度を育成しようとしたのである。ラジオから情報を収集するという形を取りながらも、その実は、ラジオから戦意高揚し、軍人援護する姿勢を植え付けようとしたのである。ラジオという音声メディアの特性を利用した思想誘導の意図が見られた。

教材に表れた映画も同じく、映画に登場する場面が軍備や兵士を登場させていることで、映画から戦争の情報を知る態度を育成しようとしていた。教材に表れた映画は外国侵略の行為を正当化しようとし、児童が映像から外国侵攻が正当な行為であると読み取れるような内容に作られていた。兵士や軍備に対して期待や将来の夢を描かせ、軍備のない地域の児童にも動画による情報伝達は、児童に強い印象を与える。戦争賛美の心情を高めるための役割を、映画というニュー・メディアが担っていたことが明らかになった。

戦意高揚、戦争賛美のために教科書に登場するメディアは、教科書という活字メディアに登場している。教科書が地理、科学、産業、生活のことを扱うこと自体、情報伝達のメディアになっていた。それも、文部省作成の国定教科書では教材の範囲が限定され、国民科国語では兵士と軍備の教材が増えた。教科書が軍国主義促進のメディアとしての役割を担っていたのである。それも、ただ情報伝達をするだけでなく、教材に兵士への思いやりを示すことで、それを読んだ児童が兵士に感動したり、兵士を支援しようとすることで、目標と夢を軍人養成、軍人援護に向けさせようとしたのである。教科書は巧みに軍国主義を推進するように作られたメディアであった。

児童にとってわかりやすい表記や内容にすることは、児童の側に立つ思想であり、教育の論理に適合していると言えよう。また、主人公を児童に設定し、場面をわかりやすくする配慮は教育的である。しかし、それが、軍国主義を促進する役割を担っていた。例えば、古典教材をわかりやすく書き換えたり、兵士を日常生活の中に登場させたりすることは、子どもに戦争について親近感を湧かせることになる。特に音声言語指導に戦争教材を扱くと、音読や劇・対話などにより登場人物の兵士の心情を理解し、兵士や戦争を身近に感じていく。言語活動を通して児童の「思考感動」を育成する教育は、軍国主義に利用されたのである。

その軍国主義の内面を支えるのが絶対的な存在を維持する天皇制であった。軍国主義教育と、児童中心主義、この矛盾する二つのことを矛盾なく統一し、児童を自発的に内面から「涵養する」ことによって軍国主義思想を植え付けるには、児童の生活から変えていく必要があった。生活の中に兵士や軍備を身近な存在として意識し、学校で教える軍国主義を家庭でも連携して実施し、家庭と学校と両方で軍国主義にしていくことで、生活自体を軍国主義に染めようとしていたのである。生活を軍国主義に染めていくことで、言語生活の「生活」が戦意高揚の国民精神涵養の生活となる。その軍国主義の「生活」の上になり立つ言語は、戦争のために国民精神涵養の思考感動の「言語」となるのであり、思想形成のための道具になっている。このように軍国主義下の言語生活の向上は、まさしく軍国主義を推進することになってしまうのである。国語教育での言語生活という概念は、児童の言語による生活を、あるべき姿へ進ませるために用いているのであり、その姿が社会の実態と関連することによって、戦時下であれば戦意高揚の軍国主義というイデオロギーと関わり、戦後であれば民主主義という思想に関わっていく。

それゆえ言語生活主義とは、音声言語重視の教育ということだけでなく、イデオロギーに即した教育そのものであり、西尾実が述べている「言語生活教育」<sup>(1)</sup>は、国民学校制度を支える論理になっていたものであり、言語活動主義は児童個人の学習を向上させようとしたのであっても、軍国主義教育に巧みに利用されるという相克を抱えていたのであった。

